

セスドノ古墳

福岡県田川市伊田所在古墳の調査

田川市文化財調査報告書

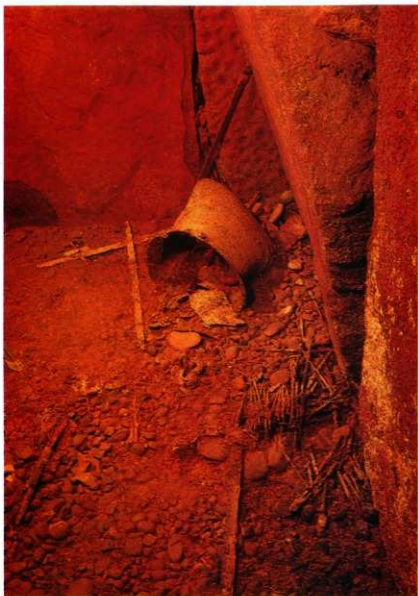
第3集

1984

田川市教育委員会

セストノ古墳

福岡県田川市伊田所在古墳の調査



セストノ古墳石室内遺物出土状態

序

本書は、昭和43年6月採土中に発見され、同年6月に緊急発掘調査したセストノ古墳（円墳）の発掘調査報告書であります。

この古墳は、田川市大字伊田3847番地の3、同番5（田川市東町）にあり、田川地方最大の規模をもつ墳丘で、円墳としては、福岡県下でも屈指のもので、田川地方の古墳文化を知る上で大変貴重なものであります。また、昭和46年11月16日福岡県指定史跡となっております。

発掘調査後16年を経過した現在、報告書が刊行できることは、関係者として喜びにたえないことであります。本書に収録された資料が、文化財に対する認識と理解、また、教育と学術研究に役立つことを願うものであります。

セストノ古墳から出土した遺物は、石炭資料館の歴史民俗資料室に他の遺跡から出土した遺物とともに展示しています。

なお、この調査及び報告書の刊行にあたり、ご尽力いただいた佐田茂先生及び県文化課職員をはじめ関係各位のご理解とご協力に対し、深く感謝の意を表します。

昭和59年3月

田川市教育委員会

教育長 角 銅 圓

例 言

1. 本書は1968（昭和43）年6月に行なわれた田川市大字伊田3847番地の3・5にあるセスドノ古墳の発掘調査報告書である。
2. 調査終了の時点で、発掘調査報告書の刊行は予定されていたが、諸般の事情で遅れてしまった。この度、当時の発掘責任者である渡辺正気氏（元福岡県教育委員会、九州歴史資料館）の了解の下に、調査に参加した佐田茂が整理したものである。当時の関係者には、遅れたことをおわびいたします。
3. 図面の作成には、主として佐田があたり、遺構写真は渡辺正気氏、遺物写真は横田義章、石丸洋氏、遺物の実測は松本肇氏、佐田によるものである。
4. 執筆は主として佐田が行なったが、遺物の出土状態は柳田康雄氏、人骨は佐野一氏によるものである。
5. 本書の作成については多くの人から御助言をいただきました。いちいち記すことはできませんが、御礼を申し上げます。
6. 本書の刊行については、福岡県文化課藤井巧、宮小路賀宏、柳田康雄氏に手続きの労をお願いいたしました。
7. 本書の編集は佐田によるものであるが、柳田氏の援助を受けた。
8. セスドノ古墳は調査終了後には破壊される運命にあったが、その重要性から、福岡県指定史跡として、保存されていることを付記しておく。

目 次

1. 調査の経過	1
2. 周辺の遺跡	3
3. 調査の記録	5
1. 古墳の規模	5
2. 内部主体	5
3. 遺物の出土状態	7
4. 出土遺物	11
5. 時 期	22
4. 考 察	25
1. 大形円墳の時代	25
2. 5世紀代の横穴式石室	28
3. セスドノ古墳出土土人骨	30
5. 結 び	32

図・表目次

Fig.1. セスドノ古墳周辺遺跡分布図	2
Fig.2. セスドノ古墳墳丘測量図(折り込み)	4-5
Fig.3. 横穴式石室実測図	6
Fig.4. 石室内遺物出土状態図	8
Fig.5. 出土遺物Ⅰ(冠、垂飾付耳飾、鏡)	12
Fig.6. 出土遺物Ⅱ(勾玉、ガラス玉にか)	13
Fig.7. 出土遺物Ⅲ(刀、刺)	14
Fig.8. 出土遺物Ⅳ(刀、刀子)	15
Tab.1. 刀剣計測表	15
Fig.9. 出土遺物Ⅴ(槍先、矛、石突)	16
Fig.10. 出土遺物Ⅵ(鉄鏝)	17
Fig.11. 出土遺物Ⅶ(短甲)	18
Fig.12. 出土遺物Ⅷ(鹿角刀装具、鉸具にか)	19
Fig.13. 出土遺物Ⅸ(香篋、鏡板付簪)	20
Fig.14. 出土遺物Ⅹ(小壺)	21
Fig.15. 出土遺物Ⅺ(円筒埴輪)	22
Tab.2. セスドノ古墳出土遺物一覧	24
Tab.3. 主要な大形円墳一覧(折り込み)	28-29

図 版 目 次

巻 頭 カ ラ ー

- | | |
|-------------------------------------|-------------------------|
| PL. 1-1 セスドノ古墳全景(調査前) | - 2 セスドノ古墳全景(調査前) |
| PL. 2-1 石室内短甲、太刀、鉄鏃出土状態 | - 2 石室内太刀、人骨出土状態(短甲除去後) |
| PL. 3- 石室内短甲、太刀、鉄鏃、杏葉など出土状態 | |
| PL. 4-1 鏡、須恵器、太刀出土状態 | - 2 鏡、須恵器小壺蓋出土状態 |
| PL. 5-1 鹿角装太刀、鉄鏃出土状態 | - 2 石室内敷石の状态 |
| PL. 6-1 滑石製小玉出土状態 | - 2 人骨出土状態 |
| PL. 7-1 短甲内部、頭蓋骨、刀出土状態 | - 2 鈴付鏡板出土状態 |
| PL. 8-1 鈴付杏葉出土状態 | - 2 石室北西隅、鉄鏃出土状態 |
| PL. 9-1 太刀、矛出土状態 | - 2 人骨出土状態 |
| PL. 10-1 玄門の状态(石室内部より) | - 2 羨道の状态(外側より) |
| PL. 11-1 珠 文 鏡 | - 2 金銅製冠片(?) |
| - 3 金銅製垂飾付耳飾 | |
| PL. 12- 玉類(内・勾玉、ガラス玉、中・滑石製玉、外・ガラス玉) | |
| PL. 13-1 鉄剣・鉄刀 | - 2 槍先・鉄矛 |
| - 3 鉄 刀 子 | |
| PL. 14- 鉄 鏃 | |
| PL. 15-1 短 甲 | - 2 鈴付杏葉 |
| PL. 16-1 鏡板付轡 | - 2 鈴付鏡板 |
| PL. 17-1 鹿角製刀装具 | - 2 鹿角製刀装具 |
| - 3 鹿角製刀装具 | - 4 鉄製品各種 |
| PL. 18-1 陶質土器(小壺) | - 2 円筒埴輪 |

1. 調査の経過

セストノ古墳の発掘調査は1968（昭和43）年6月5日より約2週間行なわれたものである。概要については花村利彦「セストノ古墳」（『田川市史』上巻1974）で紹介されているが、諸々の理由によって、発掘調査報告書の作成が遅れ、ここによりやく発掘調査報告書を刊行することができた。

田川市伊田にあるセストノ古墳は大形の円墳として知られていたが、既に墳丘の大半はなくなっており、教職員住宅建設に際して破壊されることになった。墳丘にブルドーザーを入れ整地作業を始めると、主体部の横穴式石室に当たり、田川市教育委員会は早速、福岡県教育委員会と連絡を取り、折衝の結果、緊急調査のはこびとなったのである。

調査は田川市教育委員会と福岡県教育委員会によって行なわれ、調査関係者は以下の通り。

田川市教育委員会（43年6月当時）

教 育 長	川 辺 武 郎
社会教育課長	豊 田 朝 男
同 課 長 補 佐	児 島 磯 雄
主 任	渡 辺 正 雄
"	伊 藤 昭 和
主 事	迫 田 博 克
"	藤 沢 悟

福岡県教育委員会

文化財係長	渡 辺 正 気
技 師	柳 田 康 雄
九州大学医学部	永 井 昌 文
"	佐 野 一 一
文学部	佐 田 茂
福岡教育大学	川 述 昭 人
田川郷土研究会	花 村 利 彦

昭和59年度

田川市教育委員会（59年3月当時）

教 育 長	角 銅 圓
社会教育課長	酒 井 一 雄
係 長	坂 田 政 信
主 任	田 原 孝 雄
"	田 辺 秀 紀
嘱 託	日 野 孝 司

緊急調査であって、調査後破壊される運命にあった当古墳も、石室内が全く手つかずの状態にあったために、幸いに保存されることになった。1971（昭和46）年11月16日には福岡県指定史跡となり、保存されていることは喜ばしいことである。



Fig. 1 セソノ古墳周辺遺跡分布図 (1/25,000)

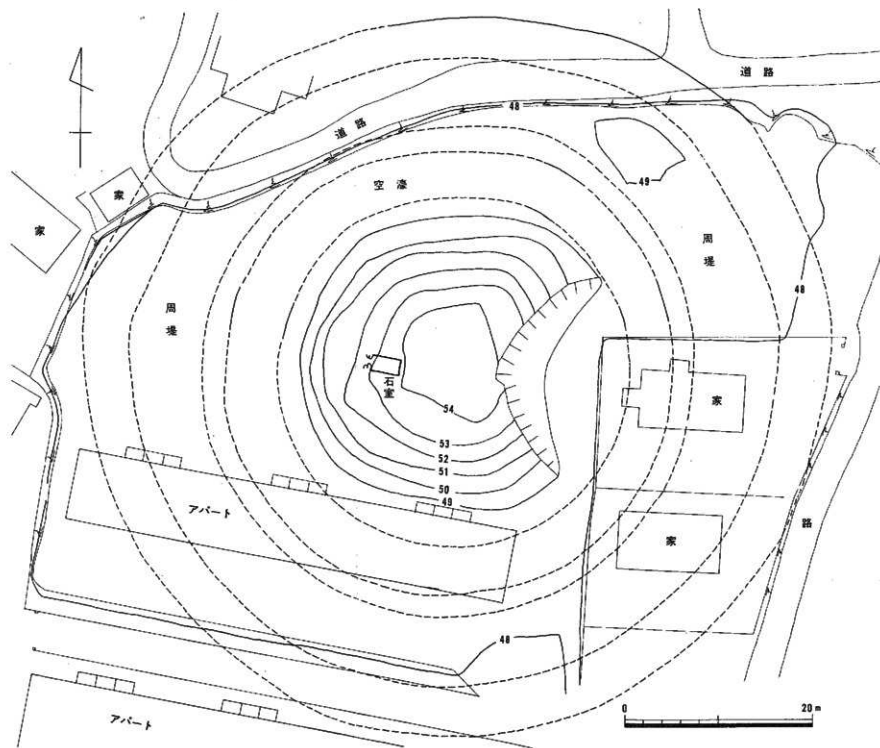


Fig. 2 セソノ古墳墳丘測量図 (1/400)

2. 周辺の遺跡 (Fig. 1)

田川地方の古代遺跡については『田川市史』上巻のなかに詳述されている。筑豊地方第一の河川、遠賀川の支流である彦山川と中元寺川の流域に形成された当地方では、縄文時代から生活を形づくってきているが、ここでは古墳時代の主な古墳について概略をのべることにする。

1. 位登古墳 (田川市位登日渡し)

田川地方最大の古墳である。前方後円墳で、全長81m、後円部径27m、後円部の高さ9mとなっているが、現在では、後円部が半壊しており、長さ50mぐらいしか確認できない。周濠についてははっきりしない。後円部には組合せ式の箱式石棺が納められていた。内法で長さ180cm、幅52cm、深さ52cmをはかり、底石は2枚、側石は各2枚、小口は各1枚、蓋石3枚でつくられている。石棺内には枕石があり、長軸は墳丘の方向と同じである。出土遺物には仿製の連弧文鏡(8.5cm)、管玉、太刀がある。

2. 伊加利古墳 (田川市伊加利)

1922(大正11)年に畑地にあった小さな盛土を整地中に箱式石棺が発見された。石棺のなかからは長宜子孫連弧文鏡が出土したことでよく知られている。直径18.5cmの後漢代の特徴的な連弧文鏡である。類似の鏡は田川郡香春町の宮原古墳、同郡方城町の三本松古墳からも出土している。

3. 見立古墳 (田川市見立)

小規模な円墳で、内部主体は南東に開口する横穴式石室である。両袖式の石室で、羨道は細長い。最下段には比較的大きな腰石を使用し、その上に自然石を積み上げて、壁をつくっている。天井石は3枚で、奥の2枚は手前の天井石より一段高く架けられている。石材はほとんどが石灰岩で、石灰岩が豊富なこの地方でもめずらしいことである。副葬品は人骨片と須恵器高杯1個が出上ただけであるが、周辺からは弥生土器、石包丁、石斧などが発見されている。弥生時代の生活面の上に古墳が築かれたのであろう。

4. 夏古墳群 (田川市夏古)

夏古地区は田川市でももっとも古墳の群集しているところで、字片辺、秋里から新生病院裏まで、傾斜地に広がっている。これらを総称して夏古墳群と呼んでいるが、いくつかのグル

一ツに分けられることは、一般の群集墳と同様である。

夏吉1号墳は横穴式石室を内部主体にもつ小古墳である。玄室左側壁には石棚状のせり出しを設けており、この地方では特異な石室構造をしている同種のものは官田町でも知られている。2号墳は墳丘の確認が困難であるが、前方後円墳の可能性も考えられている。内部主体は複室構造の横穴式石室で、田川郡方城町の伊方古墳に次ぐ大きさである。人物埴輪、馬形埴輪が出土したこと伝えられているが、はっきりしたことはわからない。

夏吉4-1号墳は直径21~22.5mの円墳で、内部主体は全長7.2mの複室構造の横穴式石室である。玄室には巨石を利用し、出土遺物には須恵器、耳環がある。4-2号墳は直径約9mの円墳で、石室は破壊がひどく、よくわからない。出土遺物には須恵器、土師器、鉄鍔がある。

5. 狐塚古墳群（田川郡大任町今任原狐塚）

大任町は彦山川の流れにそった、田川市のすぐ隣の町である。前方後円墳1基と数基の古墳、約10グループに分けられる横穴墓群からなっている。前方後円墳は全長30mの大きさで、墳丘には円筒埴輪列がめぐっている。古墳は小規模の方墳と考えられ、内部全体は上埴墓、箱形石棺、割竹形木棺で、古墳時代前期の産物と考えられている。横穴墓は44基が調査されている。くわしい内容は『狐塚古墳群』1976、『狐塚古墳群Ⅱ』1978を参照されたいが、長い墓道をもち、1基ないし数基で墓道を共有しているタイプである。筑豊地方に通有のタイプで、6世紀後半から7世紀前半のものである。

田川地方は福岡県下では横穴墓の多いところで、彦山川流域を中心に分布している。田川郡方城町の穴ヶ浦横穴墓群、野添横穴墓群、田川市の蜷ヶ丘横穴墓群、経塚横穴墓群、伊加利田中横穴墓群、田川郡大任町の上牟田横穴墓群、大行寺横穴墓群、狐塚横穴墓群、中元寺川流域では田川市の見立狐ヶ追横穴墓群、川宮法光寺裏横穴墓群が知られている。蜷ヶ丘13号横穴墓からは鉄地銀張りの甕も発見されている。

6. 岡山古墳（田川市伊加利岡山）

低丘陵上にある前方後円墳で、すでに墳丘は半壊しているが、くわしいことはわからない。

7. 伊田狐塚横穴墓群（田川市伊田）

16基が調査されている。密集度は高く、B-1号横穴墓は複室構造である。时期的には須恵器のⅣ型式がほとんどで、6世紀末を中心としている。出土遺物も須恵器が主であるが、耳環、ガラス玉、紡錘車、鉄鍔、鉄矛、雲珠がある。くわしくは『夏吉古墳群・清瀬横穴群・伊田狐塚横穴群』1983を参照されたい。

3. 調査の記録

1. 古墳の規模 (Fig.2, PL. 1)

セスドノ古墳は、田川地方では前方後円墳の位登古墳に次ぐ規模の円墳である。1967 (昭和42) 年までは墳丘の8割近くが残っていたが、調査時にはほとんど削られてしまっていて、横穴式石室のある部分のみがろうじて残っているという有様であった。

1967 (昭和42) 年までの知見と調査の結果を合せて、古墳の規模を復元してみると、次のようになる。墳丘の直径は37m、高さ5mで、周囲に幅5mの肩濠がめぐっている。さらに外側には基底部で幅15m、上部で8m前後の周堤がつくられている。これからみると、古墳は周濠と周堤をもつ直径76~78mの大きさの円墳ということになり、福岡県内でも有数の大形円墳ということになる。墳丘はほとんどが盛土によって築かれている。

主体部である横穴式石室の調査以外には、外部構造の確認は数箇所にトレンチを入れただけで、不足している部分が多い。周濠のなかからは円筒埴輪の破片が出土しており、円筒埴輪が樹立されていたことは明らかである。

2. 内部主体 (Fig.3, PL. 10)

羨道のつくりが簡単な横穴式石室を内部主体にもっている。石室は古墳の西の方に片寄ってつくられ、西の方に開口している。

石室は長さ3.2m、幅1.8mの長方形の玄室と長さ0.65m、幅0.5mの羨道で形成されている。長軸は東西方向を示している。天井までの高さは1.9mないし2mをはかる。天井は4枚の大石で架構されており、玄門に一番近い天井石は一段底くなり、そのまゝ延びて羨道の天井の段目もはたしている。

玄室の平面プランは、長さ3.2mをはかり、奥壁で幅1.72m、袖の部分で1.74m、中央の一番広いところで1.9mをはかり、わずかに胴が膨らんでいるが、ほぼ長方形を呈している。床面には大きさ3~5cmの礎が一面に敷かれている。床面は奥になるにしたがってわずかに上昇している。

側壁は削土中にブルドーザーで押されたらしく、すこし内傾している。特に奥壁に近い石は相当に傾いており、危険な状態であった。

側壁でまず注意されるのは、両側壁の構築法が全く同じであるということである。3個の大石を立て、その概略をつくり、そのうえに削石状の塊石をのせて壁をつくりあげている。中央の大石は一枚で天井まで届き、直接天井石が架構されている。しかも大石で構築された故で

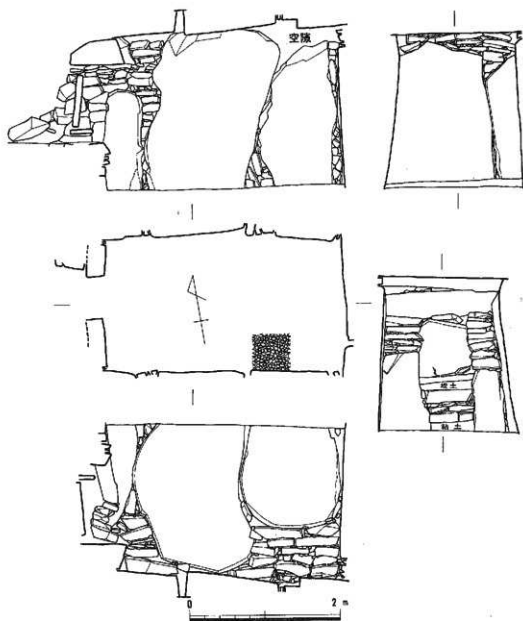


Fig. 3 横穴式石室実測図 (1/50)

あろうが、ほぼ垂直な壁面である。

奥壁は2枚の大石を側壁と同様に立てて、腰石となし、その上に板石状の塊石を平積みしている。しかし、その架構方法は石室全体にいえることであるが、比較的乱雑である。壁面はほぼ垂直である。

玄門の袖は、まず断面が長方形の厚さ20cm程の板石の長辺を立て、その上に南側壁で5段、北側壁で7段の塊石を積み上げている。その上に玄室の天井よりは35cm低く天井石が架構されている。天井石は玄室内側壁によって大部分が支えられている。その構築の時を推定してみると、玄室部がつくれ、次に袖の部分をつくり、天井石を架構して、その後、羨道の壁をつくりあげたようである。したがって羨道部の壁は天井石をささえる役目をはたしていない。

羨道は玄室の床面から一段高くつくられている。床面より54cm高くなって、羨道の床面となっている。段は下に粘土を10cmの厚さに敷き、その上に4段に石を積んでつくり、そのまゝ延びて羨道の床面となっている。さらにその上に10cm程の間隔をもって、1枚の板石が置かれ、上に板石を立てて閉塞している。

羨道は十分な調査ができなかったために、詳細についてはわからないところがある。長さは40cmほどで、両側壁とも石をわずかに積みあげただけの簡単なつくりである。幅は明確な数値を出すことができないが、袖石と接するところで、75cm、先端で85cmぐらいと思われ、わずかに入口が開いているようである。石の積み方は玄室とは異なっており、基底になる石も安定を欠き、粗雑なつくりである。

石室前面は調査時において、敷地作業によって削られてしまっていたために、ほとんど確認することはできなかった。南側の部分でわずかに残っていたが、墓道は1mぐらいの幅で羨道からひきつづき真すぐのびている。

墓道の床面は外に行く程、わずかに高くなっている。墓道と石室の関係は定かではないが、石室自体は地山の上に直接つくられ、盛土がなされている。墓道はU字形をしているが、床面は地山の上に粘質土を敷き、床面のベースとし、黄褐色土でとのえている。

石室全面には丹が塗抹されていた。発見された時にはあざやかな赤色を呈しており、内部に土砂がはいっていなかったのも、すばらしい景観であった。

石室は墳丘の中央につくられているのではなく、一方に片寄ってつくられていた。そのために別の主体部の存在も考えられたが、そのような痕跡は以前から知られていない。ほとんど削平されてしまっているので、確定的なことはいえないが、この石室だけが主体部であった可能性が非常に強い。

3. 遺物の出土状態 (Fig.4, PL. 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9)

墳丘には、いくつかの盗掘坑が見受けられたが、石室にまで到達しているものはなく、盗掘

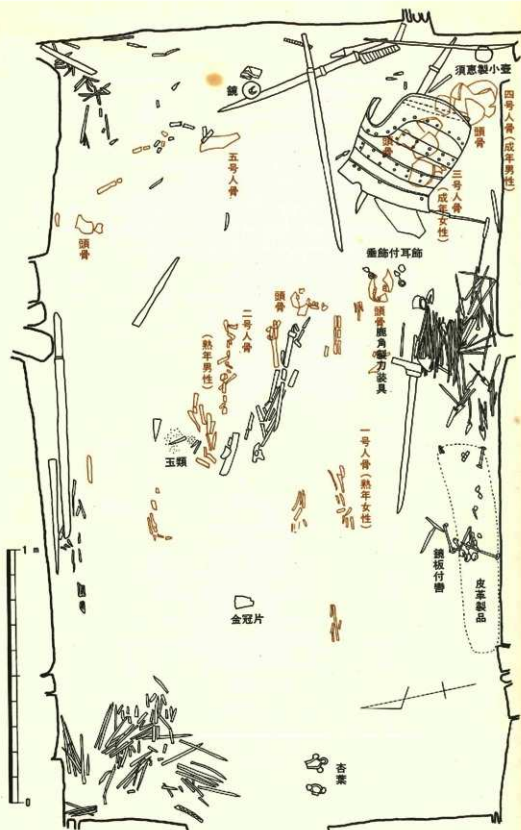


Fig. 4 石室内遺物出土状態図 (1/15)

をまねがれた処女墳であった。したがって、石室内は最後の埋葬から後世に遺物の移動はなかったものと考えてよい。これは玄門の封鎖が今回の調査まで完全な状態で残っていたことからいえる。今回の調査は、ブルドーザーにより北側壁の天井近くが一部開口したことに始まるが、この時石室内に落ちた若干の石と土砂のほかは、石室内には土砂の堆積はなく、開口部からのぞいて床の小石はもちろん、ガラス小玉まで見える状態であった。

完全な状態で残っていたために、遺物の出土状態も十分に観察することができる。

玄室奥壁の両側には各1振の大刀が切先を下にして立てかけてあった。北側の大刀は、刃を北西に向け、柄を奥壁と側壁の間に入れ、約70度の角度で立っている。南側の大刀は、刃を下に向け、同じく柄を奥壁と側壁の間に入れ約60度に立ちかけてあった。北側の奥壁と側壁のコーナーには鉄鏃が散乱していたが、これは鏃を上にして北側壁に立てかけてあったものらしく、床から68cmの壁面には、同じ高さで点々と鉄鏃が付着している。この矢が竊に入れられていたものか、ばらで立てかけてあったのかは不明であるが、立てかけてあった以上、矢柄の長さは68cm以上はあったと思われる。この同じコーナーの大刀の下床面には、綾織状の文様がついた黒漆膜が発見されたが、これは、その丸味と、大刀の下であることから鞘に付随するものであろう。これは南側コーナーでも多く発見されており、同じことがいえる。またこの付近には、側壁にそって若干の人骨が見られる。

奥壁と北側壁各々40～50cm付近には、鹿角装刀子2本、刀子4、針状小鉄器2、不明小鉄片鹿角装太刀の柄元装具片、朱、酸化鉄少量に混じって人骨小片が散乱状態であった。

奥壁中央部には、北側に切先に向けた鹿角装鉄剣の上に切先を西に向けた大刀が重なっており、剣の先の方には、珠文鏡、須恵器壺の蓋、直弧文鹿角製柄頭がある。この柄頭と前記鹿角製柄元装具片は、鹿角装鉄剣のものであろう。剣の柄の方の下には、切先を南に向けた槍先がある。

奥壁から25cm、南側壁から12cmの間をおいて背を上、南東側に倒れた短甲があるが、中には大刀が切先を北西、刃を北東に向けて通されている。大刀の下には先を北東に向けた鉄矛とポンチ形の尖頭鉄器2本が先を北に向けてあり、矛先のところには鹿角の付着した鉄鏃状のものがある。また短甲の中には、成年女性と性別不明小児骨がためてあり、この下から大きな割合を占めたガラス小玉が89個発見された。

南側コーナーには、鉄矛があり、矛先を奥壁と側壁の間に立てている。これに接して耳のついた須恵器小壺が、口を奥壁に向けて傾いており、中にはガラス勾玉1、ガラス丸玉55個がはいっていた。珠文鏡横にあった蓋は、この小壺のものである。小壺と蓋には鉄鏃が付着しているので、一時は銅器と誤して置かれていたものと思われるが、銅器といえば、石室内のもので考えれば蓋といっしょにある珠文鏡をあてるのが適当であろう。したがって小壺は、埋葬の時にでも動かされたもので、蓋の位置が本来の位置といえるのではなかろうか。

小壺の西側には、側壁に接して成年男性人骨がかためてある。また、ちょうどこの直上の側壁上には小児骨の小片が載せてあった。

以上の奥壁から石室の3分の1程度のところまでに囲まり、二次的移動の多い遺物群と違い石室を東西に3等分した中央部にあたるところには、追葬のものと考えられる二次的移動のほとんどない遺物群がある。

北側から南側へ順に述べると、北側壁直下には、大刀と鉄矛が切先を西に向けて平行に並んでいる。大刀は、刃を南に向けているが、大刀の周囲には鞘、柄の木片が多く、また、切先の約30cm先あたりから刀身に平行して刀身の中ほどまで、蓑状に黒漆膜が確認でき、黒漆膜の東端には朱漆膜の小片がある。黒漆膜は、幅約1cmほどにまらまらしているものと、幅3cmほどに平たくのびているものがあるが、大刀の刀身にはまったく付着していない点と位置がずれていることで大刀に関係あるものではないようだ。漆膜は約1mの長さには達して確認でき、少し短かいようであるが漆塗りの弓があったとも考えられる。大刀には、刀子片が1片付着している。

石室中央部には、頭を東に向けた2体の人骨が確認された。北側人骨は、熟年男性で頭部が少し南にずれて下顎骨があるが、これには上顎骨小片が共なうだけである。右大腿骨の北側には、玉類と小形鉄器の群がある。

大腿骨のすぐ横には、ガラス小玉が285個かたまってある。この小玉群に接してさらに北側に275個からなる滑石製白玉と滑石製有孔円板1個がある。白玉は紐に通されていた状態がよく残っているが、有孔円板も一連に通されたものであるかどうかは不明である。白玉群の東側には、コハク製蓋玉9個とコハク製丸玉2個が北東-南西の方向に細長く連らなって存在する。これらの玉類は、その出土状態からそれぞれ別に連ねてあったものらしい。玉類が大腿骨右側にあるところから、男性人骨の右手頭付近にあったことになる。また、玉類群中には北端に先を西に向けて石突、白玉群の中に針形小鉄器、小玉群西側にピンセット形小鉄器がある。

左側大腿骨の上とその左側には、それぞれ1個の貝製品があるが、何であるか不明。

南側人骨は、熟年女性で、これも頭部が南にずれていて、下顎骨のみで他の頭蓋骨がない。下顎骨の両端には、一対の垂飾付耳飾が付着していた。熟年男女の人骨は、ほとんど密着した状態で並んでいるが、その間とでもいうところに東西方向に細長く鉄器群がある。まず、目立つのが切先を西に向けた銅製鍔金具付刀子1、鉄刀子5、針形小鉄器4、鉄鍔のみ先を東に向けているが、他の利器は皆切先を西に向けている。銅製鍔金具付小刀の切先から15cm北側には鞘尻があり、先端は丸頭の釘2本で留めてあるが、1本の釘は遊離していた。

熟年男性頭蓋骨と北側壁の間には、他の遺物と遊離して先を南東に向けた鉄矛が1本あり袋部に一部酸化鉄が付着している。また、熟年男性の足先にも遊離して金銅製飾板(冠片)が、文様面を上にして発見された。

熟年女性人骨と南側壁の間には、大刀と鉄鍔群がある。大刀は、直弧文鹿角装で人骨とほぼ

平行に切先を西、刃を南に向けている。直弧文入りの柄頭は、茎の先端から10cm離れ、柄に接続する方を上に向けてある。柄と南壁の間には、大半が束ねられた状態で置かれている。3本の根根の外は全部細根のもので、ほぼ側壁に平行に束ねてある鉄群も切先の方により概略2群に別れる。鹿角装大刀に近い方は、切先が西側で、側壁に近い方は2、3本は逆のもの含むが、大半は切先は東を向いている。この鉄群と南側壁との間には鉄群が散乱している。

鉄群の西側の南側壁に沿ったところには、馬具と刀子がある。これは五鈴鏡板付轡を中心とし、幅約15cmで南側壁に沿って長さ約80cmの間には、皮革製品と思われる残留物があり、轡の東側には辻金具4個、鉸具2個、車輪形の鉄器がある。轡の北側の引手のところには、刀子1本がある。

玄門をはいてすぐ北側のコーナーには、細根式の鉄群が散乱している。この鉄群も北側壁に立ちかけてあったらしく側壁に鉄群が付着している。また、この鉄群の東側には、側壁の剥けた石の下から、黒漆塗髹が9個分遺存していた。

玄門直下には、五鈴付青銅製杏葉1個分が2つに折れて発見された。

以上の遺物、人骨の出土状態から、追葬が行なわれたことは確実である。5体分ある人骨のうち石室の南東部にかためてある成年男女と小児骨は、追葬のために隅にかたづけられたもので、石室3分の1の奥壁側にある遺物群を含めて、石室中央にある成年男女埋葬より古いものである。しかし、成年男女と小児間の新旧関係と成年男女間の新旧関係は不明である。さらに副葬遺物に関しても、奥壁に近い遺物群は古いものであろうが、他のものは出土状態で判断するのはむずかしい。

4. 出土遺物

金冠片 (Fig. 5-1、PL. 11-2)

小さな破片が出土しただけである。縁には刺突による三角の列点文が二列にほどこされ、その間に一列の波状文がみられ、波状文の間には円形列点が認められる。非常に薄いもので、二辺はほぼ直線で、一辺は連続弧状を呈す。最大幅5.5cm、現存長7.1cmの大きさである。

薄板の周辺部に波状文と列点が彫りてほどこされているのは金冠に特有の装飾である。当古墳ではこの一片のみの出土であるので、金冠の部分とは断定できないが、立飾の一部分である可能性を指摘しておきたい。

珠文鏡 (Fig. 5-3、PL. 11-1)

玄室内の奥壁に近いところで、鏡背を上にして出土。奥壁近くに寄せられている初葬遺物の類のところに置かれていたものであろう。

表面はみがいているが、裏面は鍍放しのまゝの粗面である。直径6.9cmの小形のもので、径0.9cmの紐がついている。平縁で、縁の幅は0.9cmあり、すこしまるみをもっている。この鏡は布に

くるんで剛葬したものらしく、粗い織目の布が四重に認められる。また、鈕にはひもが通してある。

金銅製垂飾付耳飾 (Fig. 5-2、PL. 11-3)

各部分が分離してしまっているが、図上でもとの姿に復元することができる。垂飾は金銅製で扁平な心葉形をなし、下端に連球の飾りをつけている。連球飾りは二個の楕円球である。心葉形の垂飾の部分は長径3.2cm、短径2.6cmで、まるみをもち、中央下部にくぼみをもつ。上端には半円形の孔をあけ、空球につないでいる。鎖も金銅製で、間に三個の空球を連ねている。鎖は細い針金でつくった輪を二重に折っている。空球は楕円球状を呈し、両端に半円形の環をつけている。鎖の上端には耳環に繋ぐ太さ約1.5mm、径1.4cmの環がつく。

以上のことから、鎖の数が少ない一連の短鎖式の垂飾と考えられる。心葉形垂飾に空球が直接つくことは、つながって出土したことから確認される。そして、間に1個の鎖をはさみ2個の空球が連なり、3個の鎖で環につながっていると考える。一対出土しているが、全く同じものである。

耳環 (Fig. 5-4)

一対出土している。垂飾付耳飾をつり下げていたもので、鉄地銅張りである。銅張りはほとんどなくなっており、直径が2~2.5cmぐらいの大きさをしている。

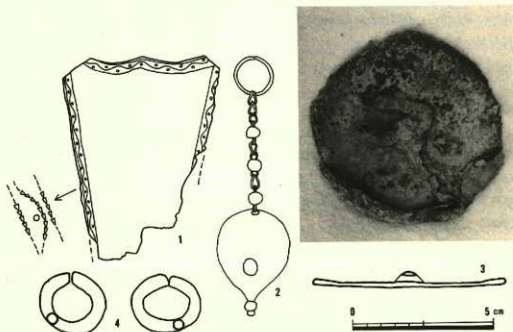


Fig. 5 出土遺物 I (冠・垂飾付飾・珠文鎖・耳環) (3/4)

硬玉製勾玉 (Fig. 6-1, PL.12)

ガラス製丸玉とともに、須恵器小壺の中に納められていた。おそらく、丸玉をつらねたなかに1個の勾玉を入れてネックレスとしていたものであろう。

ガラス製丸玉 (Fig. 6-3, PL.12)

滑石製白玉と同地点からの出土である。すこし大小はあるが、6~7mmぐらいの大きさである。いずれも濃紺色のガラス製で、表面には艶がなく、不透明である。

ガラス製小玉 (Fig. 6-4, PL.12)

濃紺色のガラス製で、丸玉と同質である。大きさは不ぞろいで、大きいものは径6mm、幅3.5mm、小さいものは径5mm、幅2.5mmをはかり、両面穿孔である。

コハク製丸玉 (Fig. 6-2, PL.12)

石室中央部、成年男性人骨にとまって出土している。ガラス製丸玉、小玉と一緒に、身体につけていたものと思われる。大きさは6mmぐらいだが、長さは幾分異なっている。孔は両面から穿孔している。

コハク製薬玉

調査時に既にほとんどがこわれており、大きさ等を知ることができなかった。丸玉と同じところから出土したものである。

滑石製白玉 (PL.12)

コハク製丸玉、ガラス製小玉と一緒に出土している。大きさは4mmで、全て同じくらいである。

滑石製有孔円板 (Fig. 6-5)

直径1.8cm、厚さ0.4cmの不整形な円板で、中央に小孔を穿っている。

櫛

玄室の西北隅、鉄鍬畔にまじって出土。9個とも同じ大きさである。幅2.3cm、高さ2.1cmある。櫛の先は腐蝕して欠失している。

剣 (Fig. 7-1, PL.13-1)

鹿角製刀装具をつけた剣である。切先がすこし欠けているが、柄までよく残っている。断面は扁平な菱形を示し、関節が一番厚く、身厚1.2cmをはかり、先端へ行く程薄くなっている。鏡も明瞭に認められる。

柄口には鹿角装が認められる。幅2.4cmで、長さは不明。破損のため、あま

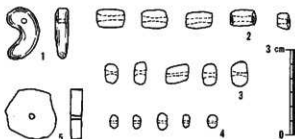


Fig. 6 出土遺物Ⅱ (勾玉・ガラス玉・有孔円板) (3/4)

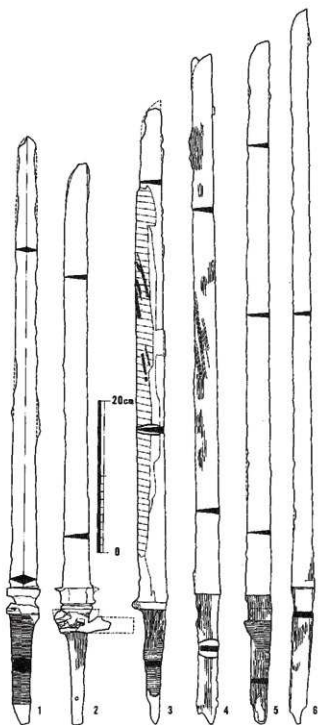


Fig. 7 出土遺物Ⅲ (刀・剣) (1/5)

りははっきりとはしていないが、線彫りで直弧文が装飾してある。柄は完全に遺存しており、糸を巻いた様子がよくわかる。柄先にも鹿角装がなされている。

刀 (Fig. 7-2, PL. 13-1)

出土した鉄刀のなかでは身幅の広いものである。切先はあまり鋭くないが、しっかりしたつくりである。茎は関のところが広く、端が狭くなっている。

柄口のところには鹿角の装具がつけられている。出土した時はわりあいよく残っていたが、取りあげる途中で破損してしまった。鹿角は幅が5.8cmある。鐔口のところで横に張り出しており、なかで一段底くなっている。鹿角の下半分には直弧文による装飾がなされている。

刀 (Fig. 7-3, PL. 13-1)

出土した7本の刀剣のうちでは、最もよく原形を保っている。切先の部分がわずかに欠損しているが、推定全長は82cm程である。身幅のわりあい広い大刀である。刃部には鞘の残片がよく残っており、鞘の状況がよくわかる。木質をそえ、その上を幅0.8cmの布できれいに巻いて鞘をつくっている。

柄口は0.9cmの幅で鐔口があり、鹿角が装着されていたらしく、

鹿角の残片が認められる。茎は関に近いところは幅広いが、末端はすぼまっており、端は尖り気味である。柄には添えた木質の上に柄巻きがなされている。

鞘には布片の痕跡が認められ、おそらく、布に巻いたまゝ、副葬されたものであろう。

刀 (Fig. 7-4, PL.13-1)

細身の直刀である。刀身の幅も全体にはほとんど変らない。刀は鞘をつけたまゝ、副葬されたもので、木質

が残っている。関は背のほうはゆるやかになっているが、刃の方では鋭く段がついている。柄の鐔口近くのところには長方形の孔があげられており、3本の糸を通してのがよくわかる。

刀 (Fig. 7-5, PL.13-1)

比較的しっかりしたつくりのものである。茎部は木柄がよく残っている。茎に木質を巻き、その上を太目の糸で巻いて柄にしている。柄口をしめす界線が木質の状況から認められる。茎の柄口のところには長方形の孔がある。

刀 (Fig. 7-6, PL.13-1)

全長94.1cmの長い刀である。身幅は関のところで2.7cm、切先近くで2.3cmの細い。柄口は、木質の残存によって明瞭に認められる。茎には柄木が部分的に残っており、ここに背の部分には1mm別の太さの柄巻きの糸の断面がよく残っている。

刀 (Fig. 8-3, PL.13-1)

出土した刀剣のなかでは一番短いものである。身幅は関のところが広く、切先の方が狭くなっている。茎は関のところで急にせまくなり、末端は細くなっている。身、柄とも木質の付着

No.	全長	刀身	身幅	身厚	茎長	茎幅
Fig 7-1	77.2	59.4	3.0	1.4	17.8	3.1
2	73.9	55.9	3.3	0.8	18.0	1.9
3	81.0	64.9	3.7	0.7	16.1	2.2
4	88.2	71.1	3.0	0.7	17.1	2.4
5	89.9	73.0	3.0	0.6	16.9	2.4
6	94.1	76.1	2.4	0.5	18.0	2.4
Fig 8-3	41.2	33.7	2.2	0.5	7.5	1.5

Tab. 1 刀剣計測表 (cm)

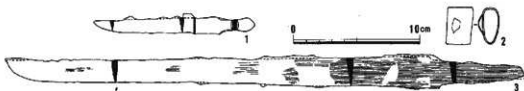


Fig. 8 出土遺物Ⅳ (刀・刀子) (1/5)

が認められる。

茎には青銅製が柄先金具がついている。断面は卵形をし、長さ1.9cm、幅は3.3cmである。

鉄矛 (Fig. 9-5.6, PL.13-2)

矛身は断面扁菱形で、いずれも細身のもので、わずかに挫角式の関が認められる。

矛身6は全長45.6cm、刃部の幅は最大2.2cmで、矛先になるにしたがい細くなっている。袋部は

断面が円形を呈しており、稜は関の部分でなくなる。袋内には木柄が遺存しているが、袋部の合せ目は認められない。

矛身5は現存長32.5cmで、矛先と袋部がわずかに欠損している。刃部は幅1.7cmで、真中に稜がある。袋部は円形を呈し、関の部分で稜はなくなる。刃部は6に比して短い。袋部の合せ目は認められるが、上部になると不明確になる。袋内には木柄が遺存している。

槍先 (Fig. 9-3, PL.13-2)

全長が28cmで、幅は3.5cmある。全体に平べったく、茎が短かく古い様相を示す。刃先はまるく、鋭さがみられない。鎧は関までつづき、一番上の目釘孔のところで終わっている。刃部は扁平な菱形を示すが、鎧ははっきりとしている。

茎は短かく、下辺に行く程細くなる。茎の長さは5cm、関のところで幅3.1cm、端で1.7cmある。目釘孔は3個あり、上のそれは、他の2個よりすこし小さい。茎には一段小さい切り込みが認められ、断面長方形を呈す。木柄に装着されていたらしく、茎には木片がわずかではあるが、認められる。

石突 (Fig. 9-4, PL.13-2)

4は全長8.5cm、袋部で2.5cmの大きさで、短かいタイプのものである。断面はまるく、真中で合せている。先端は尖り気味である。袋の中には木柄の一部が残っている。

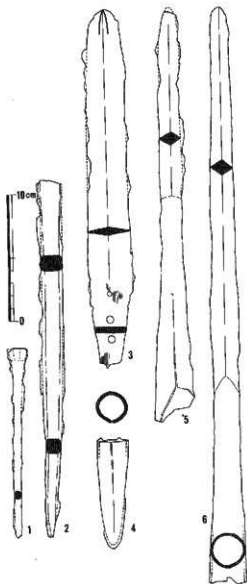


Fig. 9 出土遺物 V (槍先・矛・石突) (1/3)

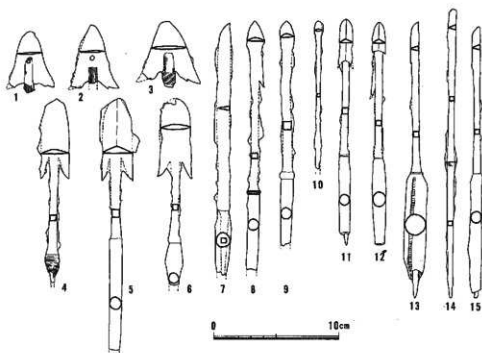


Fig.10 出土遺物VI (鉄鏃) (1/3)

1は細く、袋部でまわっているが、内には径5mmの孔がある。現存長15cmで、端部がすこし折れている。断面はまわっている。全体の形状から、石突かどうか不明な点もあるが一応石突としておく。

2は全長28.2cm袋部で1.9cmの太さがある。断面は隅丸の方形で、袋部になるにしたがい、長方形となる。袋部に孔が認められず、はたして石突になるかどうか不明であるが、一応石突としておく。

鉄鏃 (Fig.10、PL.14)

二群にわかれて出土。南側壁そばの中央付近と、入口に近い西北隅に集中している。南側壁そばの鉄鏃は束ねられて剛葬されたらしく、方向が比較的一致しており、横には刀剣なども並べられている。

鉄鏃は、大別すれば、三角形の平たい無茎のもの、銅鏃を祖型とする柳葉形に近く、深く切り込んだ腹扶をもつもの、細根式のシャープな感じの三種に分けることができる。量的には細根式のものが圧倒的に多くみられる。細根式のもの、頭の格好に各種がみられる。いずれも

残存状況はよく、矢柄の部分もよく残っている。

横翅板鉄留短甲 (Fig. 11, PL. 15-1)

玄室の東南隅で、前胴右側を下にして出土。胴のなかには小児の頭骨がはいっていた。わずかに欠損しているところがあるが、ほとんど原形をたもっている。横翅板鉄留短甲としては普通のものである。

前胴は高さ34.6cm、幅は下縁で37.8cmある。引合板は3.9cmあり、胴部におけるくびれが大きい。前胴右前側縁に2個の鎌番金具があり、鉄でとめている。覆輪は革紐を編ったものではなく、鉄板を折りかえたものである。後胴は肩幅45cm、高さ43.1cmあり、鉄板の覆輪、幅広の帯など同じつくりである。右側縁の鎌番は前胴と同じく鉄留で、したがって、この短甲は前胴の中央だけで開くことになるが、前胴左側は固定されたまゝなので、右側だけが開くことになる。

鹿角刀装具 (Fig. 12-1.2, PL. 17-1.2.3)

ともに柄先につけられていたものと思われる。1は表面の線刻がはっきりしている。柄尻の中央には径8mmの円形の掘り込みがある。さらに、中央下端は削りとりて間隙がある。表面には装飾がほどこされている。4本の直線の中に列点をほどこしたもので区画された内部に、直弧文が装飾されている。弧文には二重の線でかかれていたものもある。柄尻にも同様の装飾がみられ、区画された幅6mmの内部に直弧文がほどこされている。

2は内に長方形の掘り込みがなされている。柄先をさし込むためのものである。表面には直弧文がほどこされている。柄尻の表面には2本の線によって、木葉状の線刻がなされ、その内

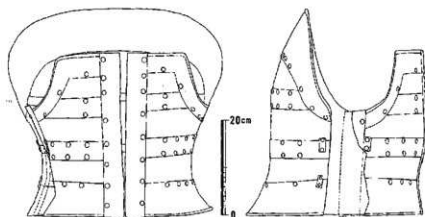


Fig. 11 出土遺物Ⅶ (短甲) (1/8)

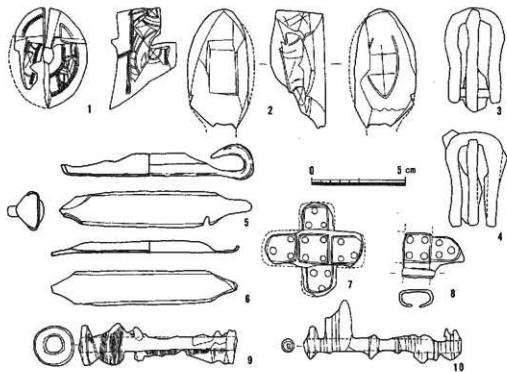


Fig.12 出土遺物Ⅱ(鹿角刀装具・銃具・帯金具ほか) (1/2)

に縦1本、横3本の直線がはしっている。

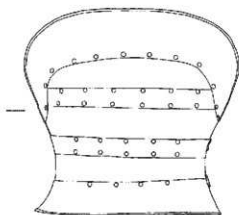
刀子 (Fig. 8-1、PL. 13-3)

長さは12.8cm、身幅は1.1cmである。刃部の長さは8cmあるが、製作時はもっと長かったものを、柄のために身の両側を鉄板ではって使用している。身にはくり込みがなされ、下端はまるくなっている。

青銅製鍔板付轡 (Fig.13-2.3、PL.16)

玄室の南壁近くで出土している。銜は鉄棒2本からなる通有のもので、引手は断面がまるく、先端はリングになっている。銜、引手の両端につく輪状のつなぎは全て塊状になっている。

鈴付鍔板は、横幅9.9cm、中央の縦幅5.7



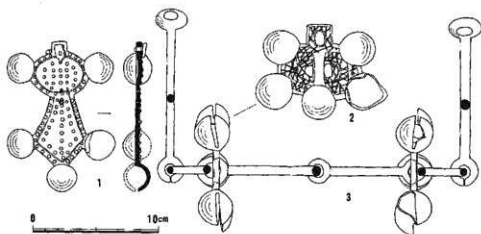


Fig.13 出土遺物Ⅷ（杏葉・鏡板付響）（1/3）

cmをはかる。楕円形の部分は横幅6.6cm、縦幅4.4cmをはかる。青銅の一枚板で、楕円形を呈し、周縁に5個の鈴を飾っている。周縁は台形の断面を呈し、全体をめぐっている。

文様は不規則な斜行線で、立聞の部分まで及んでいる。中央に銜を通す楕円形の孔をもつ。立聞は長さ1.5cm、幅2.1cmで、中央に面繋につながる孔があり、両端が三角形した長方形の鉄製釣手金具がついている。裏には草の残欠がみられる。

青銅製鈴付杏葉（Fig.13-1、PL.15-2）

鈴付の杏葉で、剣菱形の体部の5個所に球状の鈴をつけている。

剣菱形の体部は、楕円形の部分では、わずかに中膨らみになっている。周囲は4mmの幅で一段高まり、縁をなしている。この縁には円頭の新状の突起が約5mm間隔で全体にうたれている。内部にも新状の突起が鑄出されている。鈴は剣菱形の体部にくらべて大きい。5個のうち2個は半分が欠けている。

全体の大きさは、鈴を含めて縦11.8cm横8.5cmをはかり、小形のものである。張り合せではなく、鋳造品である。

辻金具（Fig.12-7.8、PL.17-4）

4個出土したが、3個はばらばらになっている。長さ5cm、幅1.9cmの長方形の薄い鉄板を十字に鉄で留めてつくっている。身と四脚にはさらに、正方形の鉄板を重ねている。身は四隅に鉄が打ってあるが、脚は3鉄である。鉄の足端は鉄板をとじ合せて裏面まで出ていると思われるが、欠損している。

全体の形は十字形をなし、扁平であるが、脚をすこしまげており、わずかに内傾している。

裏には革帯が十字についていた痕跡をのこしている。

鉸具 (Fig.12-3.4, PL.17-4)

2個が出土。轡の近くで出土し、鉄製である。輪金の頭部がすこし膨らんでおり、長さ5.5cm、幅は3.1cmである。

須恵器〔蓋つき小壺〕(Fig.14, PL.18-1)

小壺は高さ5.4cm、胴部幅7.5cmのきわめて小形で器壁は全体に薄く、焼成は非常に良好である。色調は濃青色を示す。

口縁は薄く、頭部に至るにしたがって、わずかに厚みをます。頭部は短かく、直口している。肩はわりあい張っており、そのまゝ胴部につづき、まるみをもちながら底部につづく。底部は小さな平底を呈す。

技法的には、まずかたちを整え、ヘラによって全体の形を仕上げ、底部付近をのぞいて、撫でによって仕上げているので、体部にくらべると乱雑である。

蓋はつまみをつけている。返りをもち、わりあい深いものである。口縁部で3.8cmをはかり、器高は2.9cmである。焼成は身と同じ良好で、つくりは同様である。つまみも把手と同じく、粘土紐をつけただけの簡単なものである。

蓋は鏡とならんで、埋葬遺体の頭部と思われるところから出土しているが、身は玄室の東南隅から出土した。小壺のなかには硬玉製の勾玉1個とガラス製の丸玉多数かはいっていた。元々は蓋をした小壺が鏡と並んで置かれていたものが、追葬の時に身だけを移動したものとわれ、初葬に伴っていたものと考えられることができる。

類例に乏しく、朝鮮半島伽倻地方からもたらされたものであろう。

円筒埴輪 (Fig.15, PL.18-2)

周溝内から出土したものである。ほんの一部分を調査しただけであるから、埴輪の位置などは不明である。全て破片で、全体の姿を知ることができない。

1は口縁部で、大きく外に開いている。赤褐色を呈し、表面もぎらつており、整形技法はわからない。2は基底部で、円筒埴輪としては薄手のものである。1と同じ焼成である。3は須恵質のものである。全体が須恵器特有の灰色を呈するのではなく、赤色の部分もある。器体の直径は突帯のすぐ上で15cmをはかる小形のものである。突帯は器体に比すと突出し、台形状を呈している。表面は細かい斜め方向の刷毛目で仕上げられ、内面も表面と同じ横方向の刷毛

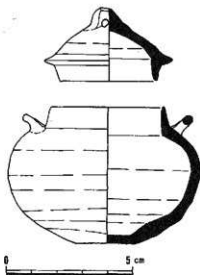


Fig.14 出土遺物X (小壺) (2/3)

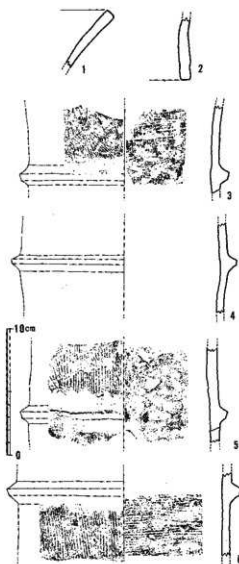


Fig. 15 出土遺物 XI (円筒埴輪) (1/3)

群₂ 1976) が、この狐塚 1 号墳のものとくらべると、セスドノ古墳の埴輪は明らかに古い時期のものであることが理解できる。

5. 時 期

このセスドノ古墳には 5 体の埋葬が行なわれており、それが同時埋葬ではなかったことは出

目である。4 は黄褐色を呈し、胴部径 16cm ぐらいのものである。器体は非常に薄くつくられ、突帯は台形状を呈するが、すこし中くぼみになっている。5 は胴部径が 15cm 程のものである。黄褐色を呈し、4、6 は同じ焼成である。突帯は台形状を呈している。表面は縦方向の刷毛目で仕上げ、内面は指によるものか、ヘラによるものかよくわからないが、なでによる仕上げである。5 は胴部径が 16.5cm ぐらいのもので、突帯は台形状を呈している。表面は縦方向の刷毛目で、内面も同じ刷毛目で、横方向の仕上げである。

胴部径が 15～17cm ぐらいの小形の円筒埴輪で、器壁は薄く、器体に比して、突帯は鋭く突出しているのが特徴といえるだろう。近くでは夏吉 2 号墳、上野古墳、狐塚 1 号墳からも円筒埴輪が出土している。

狐塚 1 号墳は全長 30m の前方後円墳で、通常の内部主体が確認されなかったことから、下にある横穴基が主体部となる可能性が高い。円筒埴輪は 3 段目の墳樹と 2 段目の肩に 2 列に並んでおり、墳頂部にも埴輪列がぐっっているようである。完形品になる円筒埴輪は器高 42.5cm、口縁部径 25.5cm、基底部径 9.5cm の大きさである。突帯は 2 本めぐっている。器壁の厚さは 2 cm 前後で、突帯は幅広くなっている。表面は縦方向の刷毛目仕上げである

(橋口達也・川達昭人・馬田弘稔『狐塚古墳

土状態、人骨の項でのべている。しかし、副葬品の状況からみれば、長期間にわたったのではなく、短期間のうちに終了したことがうかがわれ、遺物のなかに明らかな時期差を認められるようなものはない。

石室の構造については、後述するが、比較できるような構造のものがなく、断定はできないが、柳沢一男氏の指摘することく、5世紀末～6世紀初頭の頃を考えることができよう。

出土遺物について、若干の比較をしてみよう。出土遺物の類似性が強いのは、佐賀県武雄市の潮見古墳である。直径が25mぐらいの円墳で、横穴式石室を内部主体にもち、径6.2cmの仿製鏡、冠、馬具として、五鈴付杏葉、饒板、馬鐙、雲珠、轡、鉸具などが出土している。この出土遺物はセスドノ古墳でも同様で、わずかに馬鐙、雲珠がみられないだけである。五鈴付杏葉も小形のもので、内側の鋸留の様子が異なっているのみで、ほとんど変りがない。潮見古墳は6世紀中葉前後の時期が考えられているが、これと比較して、セスドノ古墳の下限の目安になるであろう。

このほか、同形式の杏葉は群馬県館林市からも出土しており、類似のものは愛知県守山市の志段味大塚古墳、茨城県宇都宮市雀宮からも出土している。何かしら面文帯神獸館の出土例と近いような気がするが、いかがなものであろうか。

短甲は横板板鋸留短甲で、大分県扇ヶ森横穴墓、福岡県甘木市茶臼塚古墳から同種のものが出土しており、扇ヶ森横穴墓は6世紀初頭の時期が考えられている。また、大阪府の黒姫山古墳は24領の短甲を出土したので有名であるが、3号短甲はセスドノ古墳のものに類似しており、上限をこれに求めることができるのではなかろうか。

副葬品との関係を考えれば、珠文鏡、須恵器小壺の蓋が奥壁の真中近くに、小壺が隅に寄せられているが、第1回の埋葬に伴うものと考えられる。頭上に鏡と玉のはいった小壺、脇に鹿角装剣という組合せを想定できる。また、追葬による成年女性骨に垂飾付耳飾がともなっていたことも間違いないだろう。あとの副葬品は具体的にどれに伴っているのかははっきりさせることはできないが、大きく移動していると思われるのは金冠片と杏葉である。

とくに、金冠片をしたものの場合、追葬による移動は考えられるが、この古墳は後世に荒されたことはないので、破片だけが副葬されたのかという疑問が生ずる。鏡片副葬という事例はあるが、はたして同じような現象と考えて良いのか、金冠片で良いのかということを含せて、興味に将来に残すものである。

ごく大ざっぱに見てきたが、このセスドの古墳を5世紀末から6世紀初頭のものと考えることは間違いないだろうが、5世紀代の石室構造ともちがっている点を考慮すれば、6世紀初頭を中心とした時期に比重のおもいことを述べておこう。

石室内出土遺物		石室外出土遺物	
金冠片	1	鉄製品	若干
珠文鏡	1	弥生土器	若干
垂飾付耳飾	1対	土師器	若干
鉄地附張耳環	1対	円筒埴輪	若干
硬玉製勾玉	1	出土人骨	
ガラス丸玉	約390	1. 熟年女性	
琥珀丸玉	2	2. 熟年男性	
琥珀簪玉	10	3. 成年女性	
滑石製白玉	256	4. 成人男性	
滑石製有孔円板	1	5. 小児骨	
櫛	9		
太刀	6		
剣	1		
短刀	5		
鉄矛	2		
石突	4		
鉄鎌	約150		
短刀	1		
刀子	5		
鏡板付髷	1		
鈴付香囊	1		
辻金具	4		
帯金具	若干 2		
鍔金具	2		
皮革襦			
漆襦			
須恵器(小壺)	1		

Tab. 2 セスドノ古墳出土遺物一覧

4. 考 察

1. 大形円墳の時代

首長墓としての前方後円墳は広く全国に分布しているが、それを補完する意味において、前方部の短かい帆立貝式古墳、大形の円墳が存在していることはよく知られている。では、大形の円墳とは、となるとはっきりとした規定があるのではなく、漠然としたものでしかない。量的にみても前方後円墳よりはるかに少なく、古墳の主流を占めるものではない。ここでも大形円墳のはっきりとした定義はできないが、直径30m前後を目度として、さらに前方後円墳の推移をかんがみて、周濠をもつものを基本として考えてみたい。しかし、時代によって周濠をもたないものもあり、それは前方後円墳の周濠の変遷と同様の考え方をして良いのであろう。また、現状では周濠の認められないものでも、調査によって検出される可能性は残されているので、流動的なものであることはまちがいない。こうした状況で、大形の円墳について概観してみよう。

嘉穂郡穂波町の忠隈1号墳は直径約35m、高さ約5mの円墳である。内部主体には竪穴式石室をもっている。長さ4.4m、幅0.8m、高さ1.1mの大きさで、割石を小口積みにし、控え積みもていねいになされている。なかに割竹形木棺が置かれていたようで、九州ではめずらしい本格的な竪穴式石室である。出土遺物には三角縁波文帯三神三獸鏡1、獸形鏡1のほか、碧玉製管玉、瑪瑙製勾玉、水晶製嵌玉、四葉座金具がある。三角縁神獸鏡は兵庫県城崎町小見塚古墳、名古屋市白山蔵古墳出土のものと同范であることが知られている。明らかに4世紀代の古墳である。今のところ、4世紀代の大形の円墳はこの忠隈1号墳だけのようで、三角縁神獸鏡と大形円墳の結びつきは注目される。

5世紀になっても、前半代は大形のものほとんどみられないようだが、内部主体に竪穴式石室、箱式石棺をもつ古墳はみられる。5世紀前半代までは、九州各地でも前方後円墳の築造はあまり多くなく、各地の先鞭をつけるかのように点々とみられるだけで、円墳の大形化も、これに即応していて、未発達段階であったのだろう。

こうしたなかで、粕屋郡志免町の七夕池古墳は数少ない5世紀前半代の大形の円墳である。墳丘直径29m、周濠を含めた直径36mの円墳である。墳丘には三段に葎石がめぐり、川原石を積みあげた竪穴式石室を内部主体にもっている。40～50歳ぐらいの女性の単体埋葬で、九州では数少ない琴柱状石製品、鏡などを副葬していた。近くにはこれより古いと考えられている前方後円墳の光正寺古墳があり、これに続くものと考えられている。ここでは前方後円墳から大形円墳への変化が、次代の動向を暗示しているかのようである。

糸島郡前原町の釜塚古墳⁽³⁾は墳丘の直径が約56m、周濠の幅が7.5～7.8mで、全長では71～72mの大形の円墳である。周濠はなかったものと考えたがよいとされている。内部主体は横穴式石室であるが、横口部の仕切石上面と玄室床面に段差をもつ。従来竪穴系横口式石室の特徴といわれていた構造をもっている。扁平割石を小口積みにして壁を構築し、柚石も板石を立てただけで羨道のつくりは入口に近くなるほど簡単になっている。出土遺物は石室内からは刀子状の鉄器が出土しただけだが、墳丘から円筒埴輪、形象埴輪の破片が出土している。5世紀中葉～後半の時期が考えられており、石室構造の面白さとともに、大形円墳の時期を考える上でも目安になる古墳である。

熊本県飽託郡北部町の羽山塚古墳は墳丘直径39～41m、周濠を含めた全長52mの円墳で、周濠には陸橋があり、5世紀中葉頃の時期が考えられている。

鞍手郡鞍手町新延の鰐塚古墳は墳丘直径38m、周濠幅6m、周濠幅約4m、全長約60mの円墳で、内部主体に竪穴系横口式石室をもっている。時期ははっきりしないが、5世紀後半のものと考えてよからう。

同じような時代の産物と考えられるのは、宗像郡津屋崎町の奴山20号墳、京都府豊津町の彦徳甲塚古墳である。奴山20号墳は墳丘直径56m、周濠幅4m前後、全長67mの大きさである。彦徳甲塚古墳は墳丘直径29m、周濠幅が6～7mと約3mの二重の周濠をもち、全長55mの円墳である。

九州における初期の横穴式石室は、最近の研究では広義の竪穴系横口式石室がほとんどで、羨道床面と玄室床面に段差をもつことが明らかになってきつつある。今まで横穴式石室のルーツともいわれてきた佐賀県浜玉町の横田下古墳でも段差がみられ、床面が平坦になるのは複室構造の横穴式石室の出現ないしは、両袖型石室の出現まで下るのではと考えられるようになっている。当然のことながら、大形円墳で、内部主体が明らかになっている古墳でもこの種の横穴式石室がほとんどである。ほかにも、佐賀県九山古墳、糸島郡前原町の狐塚古墳、佐賀県武雄市の玉島古墳などもそうである。

ここに、大形円墳の一つの特徴を見出すことができる。内部主体には初期の横穴式石室をもち、周濠、周堤をめぐらしている。円墳の形態は5世紀後半から6世紀前半代という限られた時期にみられる墳墓形態である。この時期は地方における前方後円墳築造の増加という現象とも一致している。

さらに、規模の大きい円墳は古墳築造の終る間際にもみられる。八女古墳群における竜馬山古墳、熊本県八代市近くの野津古墳群に継続するといわれる大野留古墳はもう一つの大形円墳の時代の産物である。いずれも、筑紫君、火君の奥津城と考えられている地方豪族の墳墓地である。前方後円墳系列のなかで、6世紀後半のある時期に前方後円墳の築造がなくなり、その次にくる地方豪族最後の古墳築造段階にあらわれてくるものである。この段階では、周濠、周

堤はあまり明確な形ではみられないのを特徴とし、内部主体の横穴式石室も群集墳一般に比べるとはるかに大規模である。京都郡勝山町の綾塚古墳も同様の例である。

この終末期の大形円墳の代表的なものが、宗像郡津屋崎町の宮地嶽古墳である。胸形君徳善の墓とも考えられているこの円墳は、直径34m、内部に長さ22mの長大な横穴式石室をもち、頭椎太刀、金銅製鬚・鏡板、金銅製杏葉、金銅製鞍金具、金銅製壺蓋、ガラス板、蓋付銅鏡、銅盤、須恵器、土師器の豊富な副葬品を出土している。津屋崎町に分布する宗像君の奥津城と考えられる前方円墳群の系列の最後にくるもので、7世紀後半頃と考えられる。

このようにみえてくると、終末期にあらわれる大形円墳は前方後円墳の系列の最後にあられてくる首長墓とみることができ、以後は寺院建築や火葬墓にみられるような宗教観念にかわっていくものと思われる。

大形円墳の地域によるあり方をみてみよう。筑後における首長墓の分布は郡単位でまとまっていることは、当時の地域首長の勢力圏がその程度であることを示している。山門郡では前方後円墳は流雲文縁面文帯神獸鏡を出土したといわれる瀬高町の車塚古墳しか認められないが、大形円墳としては同町の権現塚古墳、山川町のカンス塚古墳、大塚古墳がある。いずれも内部主体はわからないが、採集された埴輪からみると、権現塚古墳が古く、カンス塚古墳、大塚古墳が新しいと思われる。

権現塚古墳は福岡県文化課の調査によって、周濠がめぐっていることが判明し、墳丘直径50m、全長70mの堂々たる円墳である。大塚古墳は墳丘直径が40mで、周濠はないようである。カンス塚古墳は墳丘直径が50m程度で、周濠、周堤をもち、全長で70m以上の大きさをしている。山門郡では車塚古墳を初現として、以後は前方後円墳ではなく、大形円墳が系列につらなるものと考えられ、ここでは大形円墳を首長墓の系列でとらえることができよう。

また、旧三潁郡は水沼原主の本拠とされたところであるが、近接したところに御塚古墳、権現塚古墳、鏡子塚古墳の3基の大形の古墳がある。御塚古墳、鏡子塚古墳は前方後円墳で、権現塚古墳は二重の周濠をもつ円墳である。周濠を含めた全長150m以上、墳丘直径約55mの大きさである。御塚古墳と相接した位置にあり、御塚古墳は5世紀末～6世紀初頭と考えられており、先後関係ははっきりしないが、権現塚古墳も近い時期が考えられる。これからみると大形円墳は完全に前方後円墳の系列のなかに組み込まれていることが理解される。

同様に、大形円墳は京都郡、宗像郡でも前方後円墳の分布地域にあることが多く、前方後円墳との補完関係を強くもっている。たゞ、前方後円墳とどのような係わりをもっていたかについては、現在のところはっきりさせることはできない。

熊本県下益城郡城南町の塚原古墳群は初期の群集墳として、墳墓の変遷などを考える上で、重要な遺跡である。方形周溝墓、円墳、前方後円墳が混在した古墳群で、方形周溝墓が古く、円墳が一般的に新しい。このなかに、大形の円墳がみられる。丸山4号墳は全長32～34.5m、

墳丘直径約25m、丸山6号墳は全長33～34.5m、墳丘直径約26mの大きさで、墳丘を削平されているために、内部主体はわからない。くぬぎ塚古墳は全長36mの円墳で、内部に横穴式石室をもっている。横穴式石室は破損している部分が多いが、長崎県大村市の黄金山古墳、八女市の立山山古墳群に類似した構造をとるものと考えられ、主体部のはっきりしない丸山4号墳、丸山6号墳も同種の構造の可能性が強い。周濠から出土した土器から6世紀前半代の時期が考えられているが、群集している墳墓のなかから、大形円墳の出現してくる様子を見ることができ、さらに、すぐ横の前方後円墳の琵琶隈古墳はくぬぎ塚古墳に近い時期が考えられており円墳の大形化は前方後円墳の出現ともかかわってくるのであろう。

以上のようにみえてくると、大形の円墳は古墳時代を通じてみられるが、5世紀後半のある時期から6世紀前半代と、前方後円墳の築造がなされなくなる7世紀を前後する頃に集中している傾向をみることができる。ことに、周濠、周堤をもつ大形の円墳は前者の時代の産物であるといえよう。このセスドノ古墳も前者の時代のもので、横穴式石室の構造、出土遺物もそれを如実に示している。在地首長墓の系列に組み込めることは明らかであるが、前方後円墳との較差については将来の問題として残される。

注 (1) 児島隆人・藤田等編著『嘉穂地方史』先史編 1973

(2) 上野精志『七夕池遺跡群』(志免町文化財調査報告書 第1集) 1974

(3) 石山融『釜塚』(前原町文化財調査報告書 第4集) 1981

(4) 野田拓治・松本健郎ほか『塚原』(熊本県文化財調査報告書 第18集) 1975

2. 5世紀代の横穴式石室

前方後円墳に代表される前半期古墳の内部主体としては、竪穴式石室、粘土槨が一般的なようであるが、九州においては長大な竪穴式石室はほとんどみられず、京都郡菟田町の石塚山古墳のような例は少ない。石塚山古墳は畿内ともっとも関係のある位置にあるので、当然、畿内との関係の上に成立したことは明らかである。三角縁神獣鏡を出土した福岡市の若八幡古墳では粘土槨で、熊本県宇土市の向野旧古墳では、竪穴式石室ではあるが、内部に丹形石棺をもっている。甘木市の神蔵古墳は竪穴式石室だが、石室の隅はまるく幅は広い。

大分県の宇佐市の赤塚古墳では内部主体が箱式石棺で、畿内的な墳形と在地的な内部主体が結合されたものとされている。日向地方では内部主体が粘土槨であるものが、ほとんどあり、端正な竪穴式石室が前方後円墳と結びついている例はほとんどない。この時期の小古墳では内部主体は箱式石棺、木棺が主流である。

このような前半期の段階をへて、後半期になると、新たな埋葬施設があらわれてきて、一般に横穴式石室と呼ばれるものが出現してくる。横穴式石室の起源については、それを朝鮮半島の百濟、伽耶に求めるのが一般的で、小田富土雄、永島輝臣慎、柳沢一男氏などが論究されて

Tab. 3 主要な大形円墳一覽

遺 跡 名	所 在 地	全 長	墳丘直径	周濠幅	墳丘高	内 部 構 造	出 土 遺 物	埴 輪	時 期	備 考
1. 釜 塚 古 墳	福岡県糸島郡前原町神在	71～72m	約56m	7.5～7.8m	約10m	横穴式石室	刀子状鉄鏃	形象、円筒	5 C 中葉～後半	壁に突起をもつ
2. 狐 塚 占 墳	# 糸島郡前原町	約48m	約33m	6～10m		小型竪穴式石室 竈穴系横口式石室			5 C 後半	3段築成
3. 奴 山 2 号 墳	# 宗像郡津屋崎町	67m	約56m	4m前後	約7m					
4. 須 多 田 6 号 墳	# 宗像郡津屋崎町大石上の山	40m	40m							
5. ニ タ 塚 古 墳	# 宗像郡津屋崎町須多用2号塚	36m	36m			横穴式石室				
6. 須 多 田 15 号 墳	# 宗像郡津屋崎町須多用下ノロ	約45m	約45m							
7. 宮 地 蔵 古 墳	# 宗像郡津屋崎町宮司		34m			横穴式石室	銅鍔大刀、金銅製鏡板付簪、金銅製雲龍、金銅製短金具、金銅製雲龍、銅製小刀、銅製付耳釧、勾玉、ガラス小珠、滑石製白玉、琥珀製玉丸玉、銅、金銀片、刀、手鐲、短巾、須恵器小皿		7 C 前半	石室長22m 敷をもつ
8. セ ス ド ノ 古 墳	# 田川市伊田セスドノ	76～78m	37m	5m	5m	横穴式石室	麻文鏡、神師付耳釧、勾玉、ガラス小珠、滑石製白玉、琥珀製玉丸玉、銅、金銀片、刀、手鐲、短巾、須恵器小皿	円 筒	5 C 末～6 C 初	外堤幅16.5m 5体埋葬
9. 鶴 塚 (1号) 古 墳	# 鞍手郡鞍手町新砥	約60m	38m	6m	約4m	竪穴横口式石室				外堤幅約4m
10. 新 砥 人 塚 古 墳	# 鞍手郡鞍手町新砥大塚		約50m			複室の横穴式石室	銅、青銅、鉛錠、辻金具、雲母、緑釉の土師器、銅、鉄、刀、短剣、金具、環金具、銅製小瓶、鉄九曜可瓦、須恵器、滑石製半玉		6 C 後半	
11. 八 幡 塚 古 墳	# 鞍手郡岩倉町竹原		約35m	周濠あり		横穴式石室	須恵器片	円 筒		基石あり
12. 忠 隠 1 号 墳	# 嘉穂郡嘉穂町忠隠段々		約35m		約5m	竪穴式石室	三角縁神獣鏡、鳳形鏡、管玉、勾玉、鉄玉、西粟座金具			
13. 七 夕 池 古 墳	# 粕尾郡志免町日富七夕谷	36m	29m	3.5m	3.7m	竪穴式石室	連冠文鏡、穿柱形石製品、管玉、勾玉、銅、銅板、鉄鍔、白玉、鉄盤玉、戴手刀子、陶質土師、土師器	埴輪なし	5 C 前半	石室は塊石づくり 40～50歳女性人骨埋葬
14. 綾 塚 古 墳	# 京都府藤山町中黒田	約50m	約41m	約4.5m	約8m	複室の横穴式石室(家型石棺)			6 C 後半	石室長21m
15. 橋 塚 古 墳	# 京都府藤山町上黒田橋塚		40m		7m	複室の横穴式石室			6 C 後半	石室長15.6m
16. 彦 徳 甲 塚 古 墳	# 京都府豊津町彦徳	55m	29m	6～7m、約3m	6.1m				5 C 後半～6 C 前半	二重の空堀、周堤幅約3m
17. 桜 花 塚 古 墳	# 浮羽郡浮羽町朝田		50m		6m	横穴式石室		円 筒	6 C 後半	装飾古墳
18. 楠 名 古 墳	# 浮羽郡浮羽町朝田楠名		約30m			複室の横穴式石室			6 C 後半	前庭が後室より大きい
19. 人 塚 古 墳	# 浮羽郡出主丸町		約70m					埴輪あり		毒石あり
20. カ ン ス 塚 古 墳	# 山門郡山門町馬野赤坂	70m以上	約50m	8m	7m			形象、円筒		周堤をもつ
21. 大 塚 古 墳	# 山門郡山川町河原内大塚原		40m		4～5m			円 筒		
22. 権 現 塚 古 墳	# 山門郡瀬高町大塚	約70m	約50m	7～11m	4.5m			円 筒		
23. 弘 化 谷 古 墳	# 八女郡広川町広川弘化谷	約60m	約35m	約5m	約6m	横穴式石室	銅環、丸玉、鉄鍔、刀子、須恵器			周堤をもつ。石彫彫に装飾
24. 真 浄 寺 2 号 墳	# 八女市本		30m以上			竪穴系横式石室②	短巾	円 筒		
25. 真 浄 寺 3 号 墳	# 八女市本		30m以上							
26. 川 大 古 墳	# 八女市川大									
27. 大 山 塚 古 墳	# 八女市宅間田		30～33m		5.3m	複室の横穴式石室			6 C 後半	装飾古墳
28. 童 男 山 古 墳	# 八女市山内北童男					複室の横穴式石室			6 C 末	石彫彫をもつ
29. 一 念 寺 古 墳	# 八女市豊福鹿見島		32m		4m			形象、円筒		
30. 権 現 塚 占 墳	# 久留米市大吾寺町苅木彼岸田	150m以上	約55m	10数m	9m		須恵器、土師器、陶質土師	形象、円筒		2重の周濠
31. 下 馬 場 古 墳	# 久留米市草野町吉木		約30m		約5m	複室の横穴式石室		形象、円筒	6 C 後半	装飾古墳
32. 狐 塚 古 墳	# 朝倉郡朝倉町人地		約30m			複室の横穴式石室				
33. 古 植 荷 塚 古 墳	佐賀県三基郡上峰村坊所原		約40m			横穴式石室	須恵器	円 筒		石室は方形プラン
34. 玉 島 占 墳	# 武雄市		40m			竪穴系横口式石室				
35. 丸 山 古 墳	#		45m			横穴式石室	熊留層底付簪、横別板鉄鍔短甲、短刀、鉄鍔、戴手刀子、鎌、勾玉、管玉、鉄鍔		5 C 後半	二段築成。石障系 玄室は方形プラン
36. 丸 山 4 号 墳	熊本県下益城郡城南町塚原	32～34.5m	約25m			消 滅	鉄鍔、土師器、須恵器		6 C 前半	
37. 丸 山 6 号 墳	# 下益城郡城南町塚原	33～34.5m	約26m			#	土師器			
38. く ぬ ぎ 塚 古 墳	# 下益城郡城南町塚原	36m		周濠あり		横穴式石室	土師器			
39. 御 倉 占 墳	# 阿蘇郡一の宮町		33m			複室の横穴式石室				石屋形、装飾古墳
40. メ レ ガ ン ノ ン 占 墳	# 植木町		30m		6.6m					
41. 羽 山 塚 古 墳	# 飽託郡北部町飛田差ノ木	52m	39～41m	周濠あり					5 C 中	西に陸橋あり
42. 大 野 窟 古 墳	# 八代郡電北町大野芝原		約42m			複室の横穴式石室	須恵器、土師器		6 C 後半	
43. 奎 白 塚 古 墳	# 八代市上片町		60m				須恵器、土師器			
44. 鬼 の 窟 古 墳	宮崎県西都市西都原	約62m			約7m	横穴式石室	須恵器			周堤幅約7m
45. 西都原169号墳(110号)	# 西都市表		44.5m	周濠あり	約7m	木 棺	短刀、刀子、斧頭、銅網、貝銅、竹筒、鉄鍔、鍬式鏡	形象、円筒		円筒形は2個所 土師器は多数

(注 この表は緊急に作成したものであり、ごく一部のものであることを付記しておく)

いる。それぞれすこしづつ結論がちがうが、渡米集団のちがいによって、タイプが異なっているのだとされるものもある。

新しくあらわれる埋葬施設について、小田富士雄氏は、①竪穴系横口式石室、②横口式家形石棺、③横穴式石室に分類されて、それぞれの発展過程について考察を加えている。一方、柳沢一男氏は石室についてだけであるが、①石障系石室、②横田下型石室、③竪穴系横口式石室に分類し、その違い、系統についてくわしく論述されている。この分類は基本的には同じで、小田氏は横穴式石室を横田下型と小坂大家型に分けているが、柳沢氏では横田下型を石障系石室ということになっている。そして、これらの初期の埋葬施設に変化がみられるのが、小田氏では複室構造横穴式石室の出現、柳沢氏では両袖型石室の出現とされている。

さらに、柳沢氏は竪穴系横口式石室について考察をすすめ、大型のもの（A型）、小型のもの（B型）に分類し、その出目については性格を異にしていると結論づけている。A型は単独墳がほとんどで、B型は群衆墳形態をとる場合が多く、時代的なものも考えあわせて、遺墓集団の違いに求めている。ことにA型の祖形を福岡市の老司古墳3号石室に求めて、筑前型の波及は政治勢力の進出ともいわれている。そして、セスドノ古墳の横穴式石室はA型の類型に求められるが、特殊な形で、他に類例がみられず、つながりを求めることができないとされている。

私自身、石室の構造についての見解があるわけではなく、セスドノ古墳の石室構造について言及することはできない。構造上の特色を改めて列記すれば次のようになる。玄室の長さ3.2m、幅1.8m、高さ2.05mをはかり、長さとの比率は1.8となり、柳沢氏のいうA型石室とほとんど同じである。奥壁と両側壁は大きな石を立てて構成している。奥壁は1枚半、側壁は各3枚の大石を使用し、入口に近い部分の1枚は小さい。側壁の中央の大石は天井まで届き、天井石を受けている。天井は3枚の石をのせている。隙間には幅の広い板石を積んでいるが、通常の小口積みのように丁寧ではない。壁はほとんど直立している。

玄門の構造は左右に幅の広い板石を立てて袖石とし、その上に5ないし7個の板石を平積みにして、上に横石を横に架している。入口は玄室の床面上に粘土と板石を交互に積み、70cm程の段差を設けている。閉塞は外側に板石を立てている。前壁は調査が不十分であるが、袖石の前面よりすこし外側にわずかに雑な石積みをしている。

こうした石室の構造は特異であり、初期横穴式石室のなかで、これだけの大きな石を使用する例はなく、また、腰石の使用とはいっても、石を横に使用しているのもめずらしい。比較する材料にとばしいので、何ともいえないが、5世紀末へ6世紀初頭という柳沢氏の考えは、副葬品からみてもほぼ妥当な時期ではないかと考えられる。

3. セストノ古墳出土の人骨

石室内に次々に埋葬を行ったらしく、小児を含めてすくなくとも5体分の人骨が見出された。いずれも保存状態は良くなく、その排列にも、乱れが生じている。

以下それら各々について記述する。

第1号人骨

石室のほぼ中央部に2体が並列して存在しているが、その内の石室入口から見て右側（即ち南側）の個体。

中央部で二つに折れた下顎骨とその歯牙、鎖骨小破片、左右上腕骨及び橈骨の破片、下肢骨らしいものの破片より成る。下顎以外の肢蓋骨は見出されないが、上顎切歯が3本残存している。下顎切歯は浅く、骨頭も小さく、枝高も低い。歯牙の磨耗はやや進行して居り、これらの点から熟年女性と推定される。

四肢骨の排列から見て、玄室の奥の方に頭を向け、体の軸をほぼ壁面に平行にして（即ち東枕で）仰臥伸展位に葬られていたらしい。

下顎の両側から一対の耳飾が出土している。

第2号人骨

第1号人骨の北側でこれに並行し、殆んど接して存在する個体。

頭蓋は上顎骨小破片、下顎骨破片とそれらに伴う歯牙のみで、その他には左右の上腕、前腕及び大腿骨の破片が残存している。

下顎小白部には軽い下顎隆起が両側共に発達している。歯牙の磨耗は第1号と同じか少し進んだ程度である。大腿骨はやや太く、断面形は矢状径が横径よりかなり大きい。

これらの点から熟年男性と推定される。第1号と同じく仰臥伸展位であつたらしい。

第3号人骨

石室の東南隅近くにある短甲の中に入っていた頭骨で、縫合がはずれてばらばらになり、配置も多少乱れている。

骨壁はやや薄く、縫合は未閉鎖だった様である。右側では後壁より発生した外耳道骨腫（径6mm、高さ3mm）のため外耳孔は狭くなっている。左側は破損のため不明である。第三大臼歯が既に僅かながら磨耗を受けている。

これらの点から成年女性と推定される。

下顎骨骨体が存在すること、及び歯牙の状況から、第1号人骨又は第2号人骨とは別個体であることは明らかである。頭骨以外の骨は全て行方不明である。他の骨に比して朱が厚く附着している。

第4号人骨

石室の南東隅角部にあった頭骨で、ばらばらになっている。第3号人骨に比して骨壁は厚く眉上弓、乳様突起等の発達が良い。外耳道骨、臙は存在しない。下顎は破片も歯牙も検出できない。上顎歯牙は小白歯4本と、大歯、大臼歯各1本のみで、磨耗は第3号人骨と同じ位である。

これらの点から成人男性と推定される。

第1号人骨は女性らしいということから、第2号人骨は、上顎小白歯が残存していることから、本頭骨と同一個体に属する可能性は否定してもよいであろう。

第5号人骨

頭蓋骨、肩甲骨、肋骨等の破片より成り、第3号人骨の附近に散在していた。上、下顎及び歯牙は検出されなかった。

10才前後の小児骨と推定される。性別は不明である。

なお石室東南隅の腰石上から小児の頸椎1個が発見されたが、これも本個体の一部と考えられる。但し、何故この様な位置にあったのかは不明である。

以上の他、石室内のあちこちから所属個体不明の遊離人骨が出土している。

a) 第4号人骨のすぐ近くから成人の上腕骨及び桃(?)の小破片が発見された。第4号人骨の一部である可能性が高い。

b) 石室北東隅近くより、成人の前腕骨片が発見された。第1号人骨又は2号人骨の可能性はまずないが3、4号人骨のどちらかであるか、又は全く別の個体に属するものか明らかでない。

c) そこから数十厘西側即ち、入口に近い所から、頭蓋骨の破片が見出された。所属は不明。

d) 第2号人骨の右大腿骨の外側下方約40cmの所に長管骨々片若干個が散乱していた。やや位置が離れすぎて居るが、第2号の下腿及び足骨かも知れない。

e) 東壁に近い所にあった陶製小壺内に小児の骨片らしいものが僅かに入っていた。第5号の一部である可能性もあるが、明らかでない。

総 括

以上を総括すると石室内には少くとも、5体の人骨が埋葬されていた。その内容は男性2体、女性2体、小児1体である。

埋葬順位は第3、4、5号人骨が先に埋葬され(この中での順位は不明)、これらが白骨化した後から第1人骨及び2号人骨が埋葬されたものと考えられる。その際、以前あった人骨を片付けて東壁附近に置いたのではあるまいか。散乱人骨はこれら片付けられた人骨に所属するものであろう。第1人骨及び2号人骨の頭蓋はもう少し残存しても良いと考えられるのに、見当らない。この点に関しては疑問を提出しておく。

5. 結

び

田川市内でも、近年いくつかの発掘調査が行なわれ、すこしずつ、地域の解明も進んでいる。16年前に調査したこのセスドノ古墳の発掘調査報告書を刊行できたことで、すこしは寄与できたのではと考える。出土した遺物は田川市石炭資料館のなかに展示されている。また、古墳も福岡県指定史跡として保存されていることは喜ばしいことである。

本調査で明らかになったことを再度確認してみよう。墳丘は調査時において破壊が激しかったが、全長76～78m、墳丘直径37m、高さ5m、周濠幅5m、周堤幅15mの大形円墳であることが判明した。石室は初期の構造をもつ横穴式石室で、長さ3.2m、幅1.8m、高さ1.9～2mの長方形の玄室と長さ0.65m、幅0.5mの羨道で構成されている。石室の特徴をみると、奥壁、側壁は大きな石を使用しており、それでほとんどの壁を構築し、隙間に塊石をつめ込んだような感じで、大石がそのまゝ天井石を支えているところもある。玄門のところは、袖に立石を立て、その上に5～7段石を積んで、天井石をのせている。玄室と羨道の床面には0.54mの段差がついており、竪穴系横口式石室の特色をもっている。羨道からつづく墓道は急に上がることなくゆるやかにつづいているものと思われる。

石室内部の状態は珍らしいことに、全く手つかずのまゝであった。調査時には石室の使用が終ったまゝの状態で、遺物、人骨もそのまゝ目にする事ができた。5体の人骨が埋葬されており、中央の1号、2号人骨が最終埋葬のものであることは状況から明らかである。出土遺物は追葬に際して移動しているので、確定的なことはいえないが、鏡、陶質土器、短甲が初葬時のもので、垂飾付耳飾は中間時の埋葬に伴うことは、3号人骨についていることからわかる。

以上が調査によって明らかになったことである。時期的には5世紀末～6世紀初頭の頃に置くことができるが、この時期は各地で、大形円墳がつくられた時代である。田川地域では前方後円墳の数も少なく、大形円墳とは補充関係にあることは認められ、地域首長墓の系列に組み込むことは可能であろう。しかし、豊前地域のように前方後円墳の数も多いが、大形円墳も多く分布しているところでは、単に首長墓系列に組み込むだけでは解決しない。また、八女市の立山2号墳と立山3号墳のように大形円墳が近接してあることも多く、前方後円墳の立地とは若干異なった様相を示す場合もある。

大形の円墳にはもう一つのタイプがあり、巨石積みの大きな横穴式石室を内部主体にもつ6世紀後半以降の古墳は、地域首長墓系列の最後にくるのは今まで言われている通りである。

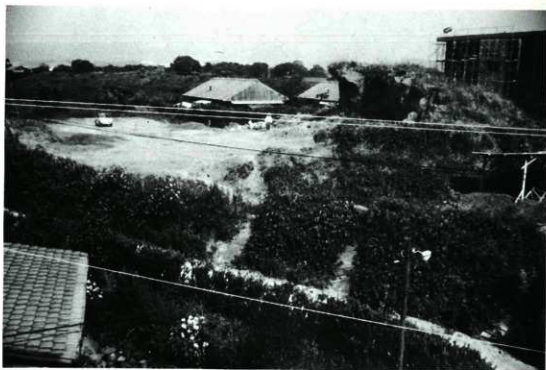
大形円墳の歴史的内容については、色々な様相を考えることができるが、位置づけはまだ不明確と言わざるを得ない。このセスドノ古墳では鉄器の量が多いが、戦闘的な性格をうかがわせるのかも知れない。

圖

版



1. セスドノ古墳全景(調査前)



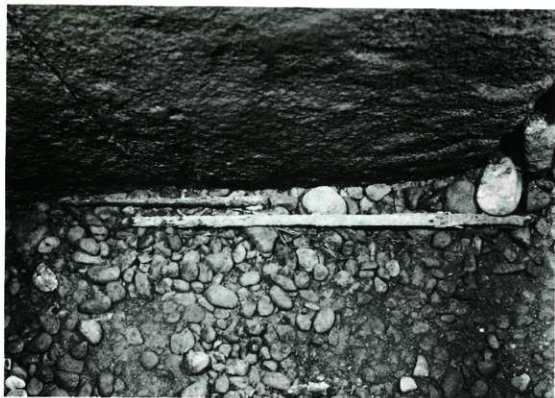
2. セスドノ古墳全景(調査前)



1. 石室内短甲・太刀・鉄鐙出土状態



2. 石室内太刀・人骨出土状態(短甲除去後)



1. 太刀・矛出土状態



2. 人骨出土状態



1. 鏡・須恵器・太刀出土状態



2. 鏡・須恵器小壺出土状態



1. 鹿角装太刀、鉄釵出土状態



2. 石室内敷石の状態



1. 滑石製小玉出土狀態



2. 人骨出土狀態



1. 短甲内部・頭蓋骨・刀出土状態



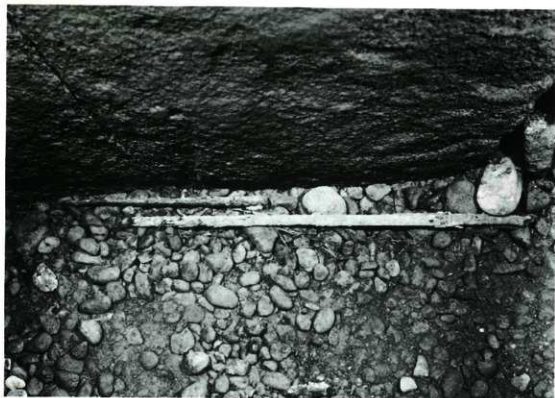
2. 鈴付鏡板出土状態



1. 鏡付古窯出土狀態



2. 石室北西隅鉄鍬出土狀態



1. 太刀・矛出土状態



2. 人骨出土状態



1. 玄門の状態（石室内部より）



2. 甬道の状態（外側より）



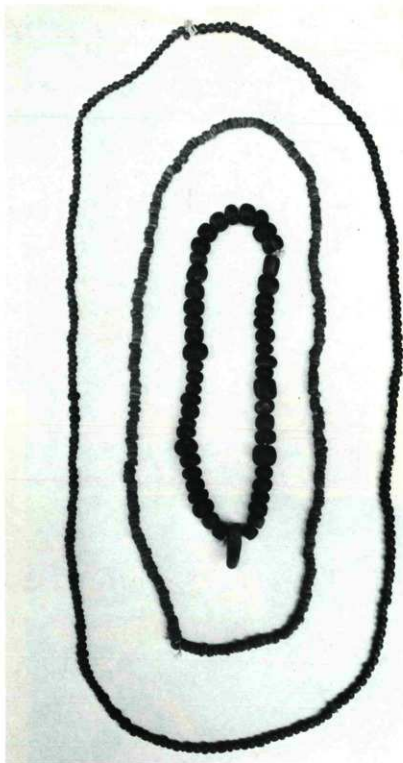
1. 珠文鏡（布でつつむ）



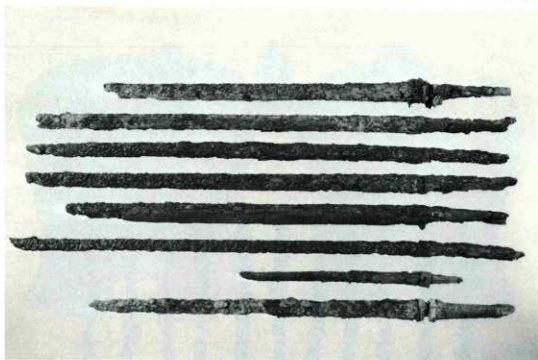
2. 金銅製冠片（?）



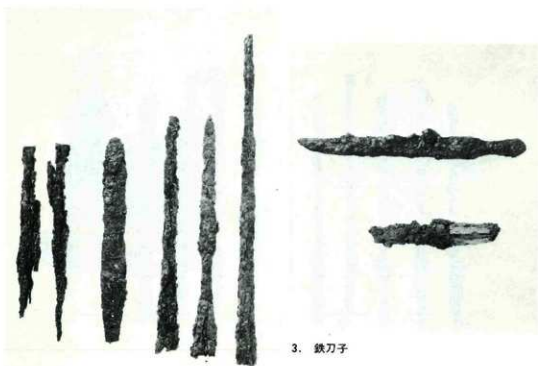
3. 金銅製垂飾付耳飾



玉類(内・勾玉・ガラス玉・中・滑石製玉・外・ガラス小玉)

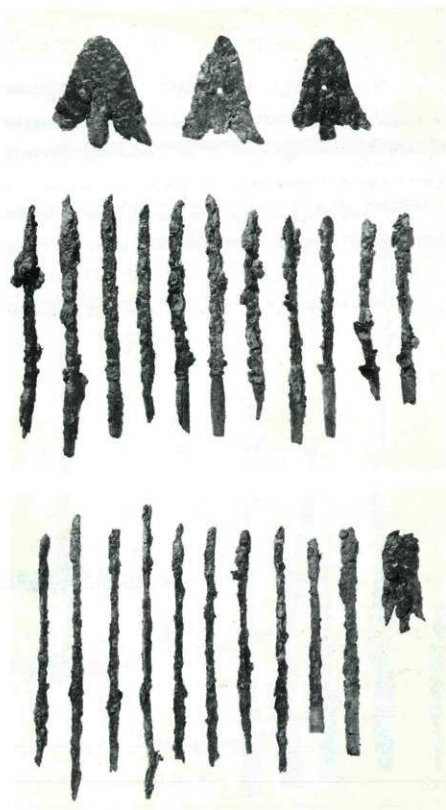


鉄剣・鉄刀



3. 鉄刀子

槍先・鉄矛





1. 短甲（前）



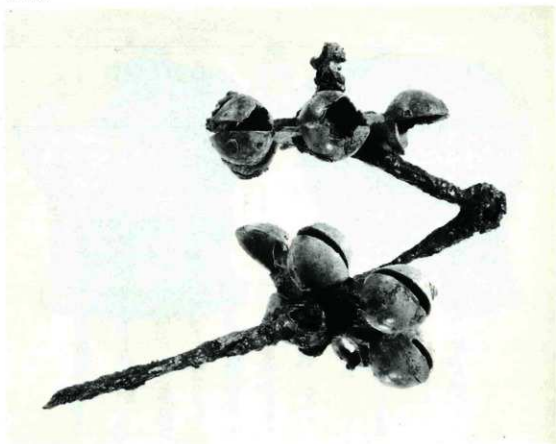
短甲（後）



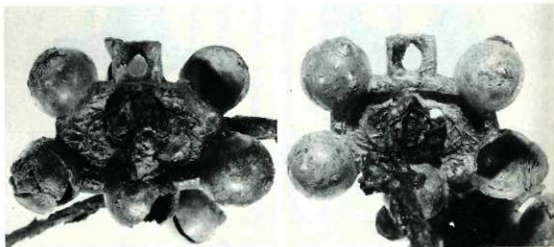
短甲（横）



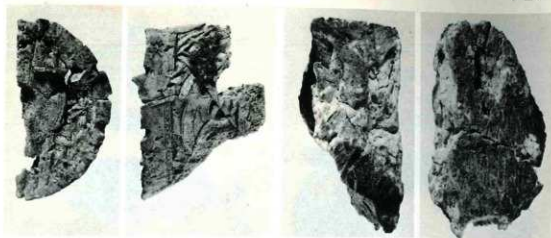
2. 鈴付杏葉



1. 鏡板付響

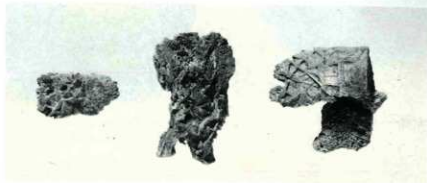


2. 鈴付鏡板

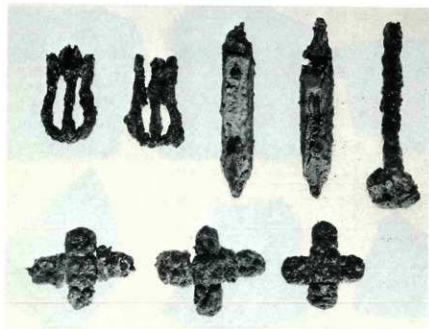


1. 鹿角製刀装具

2. 鹿角製刀装具



3. 鹿角製刀装具



4. 鉄製品各種



1. 陶質土器 (小壺)



2. 円筒埴輪

セスドノ古墳

昭和 59 年 3 月 31 日

発行 旧 川 市 教 育 委 員 会
旧 川 市 大 字 千 代 町 6 - 3

印刷 青 柳 工 業 株 式 有 限 公 司
福 岡 市 中 央 区 渡 辺 通 2 丁 目 9 の 31

